# 認知症サポーター養成講座修了者の活動実態と 活動阻害要因に関する実証分析

宮本 恭子

島根大学 法文学部 教授

# 【スライド1】

認知症サポーター養 成講座修了者の活動実 態と活動阻害要因につ いて分析を行いました ので、報告をさせてい ただきます。

### 【スライド2】

今、認知症施策は国 家戦略としての取り組 みが始まっています。

その背景には、家族 とか専門職以外の地域 全体で認知症の方を支 える必要性が高まって いるということがあり ます。こうした中、平 成26年度認知症サミッ ト日本後継イベントが 開かれて、厚生労働省 だけではなくて政府一 丸となって、生活を支 えようという取り組み が始まっています。

#### 【スライド3】

そして、平成27年度、 新オレンジプランとい うことで、さらに施策 が進んでいっておりま す。

新オレンジプランの

#### スライド 1

2016年12月3日 第23回ヘルスリサーチフォーラム

認知症サポーター養成講座修了者の 活動実態と活動阻害要因に関する実証分析

> 島根大学法文学部 宮本 恭子

miyamoto@soc.shimane-u.ac.jp

#### スライド 2

#### 我が国の認知症施策を加速するための新たな難略の策定について

#### 認知症サミット日本後継イベント〔平成26年11月6日〕

#### 安倍総理大臣の挨拶よりへ

そこで、私は本日ここで、**我が国の認知症施策を加速するための新たな戦略を策定するよう**、 厚生労働大臣に指示をいたします。 我が国では、2012年に認知症施策推進5か年計画を 定し、医療・介護等の基盤整備を進めてきましたが、新たな戦略は、厚生労働省だけでなく、 政府一丸となって生活全体を支えるよう取り組むものとします。

- [新たな戦略の策定に当たっての基本的な考え方]① 早期診断・早期対応とともに、医療・介護サービスが有機的に連携し、認知症の容態に応じて切れ自なく提供できる循環型のシステムを構築すること② 認知症高齢者等にやさしい地域づくりに向けて、省庁横断的な総合的な戦略と
- ③ 認知症の方御本人やその御家族の視点に立った施策を推進すること

## $\neg$

#### 認知症施策推進総合戦略(新オレンジプラン)〔平成27年1月27日〕

資料: http://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-12301000-Roukenkyoku-Soumuka/04.pdf

### スライド3

#### 認知症施策推進総合戦略(新オレンジプラン)

- ~認知症高齢者等にやさしい地域づくりに向けて~の概要
- 高齢名の約4人に1人が認知症の人又はその予傷群。高齢化の進展に伴い、認知症の人はさらに増加 2012(平成24)年462万人約7人に1人) ⇒(動) 2025(平成37)年約700万人(約5人に1人)
  認知症の人を申に支えられる側と考えるのではなく、認知症の人が認知症とともによりよく生きていくことができるような環境整備が必要。

#### 新オレンジプランの基本的考え方

認知症の人の意思が尊重され、できる限り住み慣れた地域のよい環境で自分らしく暮 らし続けることができる社会の実現を目指す。

- ・原生労働省が関係者合庁(内閣官房、内閣京、警察庁、金融庁、消費者庁、総務省、法務省、文部科学省、農林水産省、経済産業省、国土交通省)と共同、て策定 ・新ブランの対象期間は団境の世代が75歳以上となる2025(平成37)年だが、数値目標は、介護保 終に合わせて2017(平成29)年度末等 ・策定に当たり認知症の人やその家族など様々な関係者から極広く意見を聴取

- ①認知症への理解を深めるための普及・啓発の推進 ②認知症の容態に応じた適時・適切な医療・介護等の提供 ③若年性認知症施策の強化
- 0
- の
- ○過密財産の人の介護者への支援
  ⑤認知症の人を含む高齢者にやさしい地域づくりの推進
  ⑥認知症の予防法、診断法、治療法、リハビリテーションモデル、介護モデル等の研究 柱 開発及びその成果の普及の推進 ⑦認知症の人やその家族の視点の重視

資料: http://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-12301000-Roukenkyoku-Soumuka/04.pdf

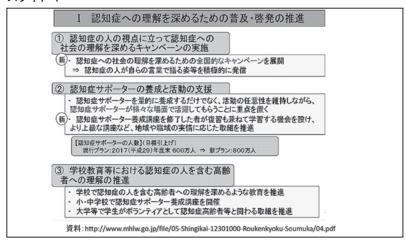
考え方ですけれども、認知症の方の意思が尊重され、できる限り住み慣れた地域の良い環 境で、自分らしく暮らし続けることができる社会の実現を目指すということで、大きく7 つの柱が示されています。

その一つ目、認知症への理解を深めるための普及・啓発の推進ということ。そして、こ の中で特に注目されているのが、認知症サポーターの養成ということになります。

### 【スライド4】

その認知症サポー ターの養成という点に ついては、認知症サ ポーターの養成と活動 の支援ということで、 既に量的な養成はかな り進んでいますので、 さらに量的な養成を進 めると同時に、活動の 任意性を維持しながら、 さまざまな場面で活用 してもらうことに重点

#### スライド 4



が置かれるようになっています。

そして、新オレンジプランの中では、認知症サポーター養成講座を修了した者がさらに 学習機会を深めるとか、より上級な講座を受講していただいて、地域あるいは職場の実情 に応じた取り組みを推進するということに、今後は重点が置かれることになっています。

### 【スライド5】

ここで認知症サポー ターの定義ですが、厚 生労働省では「認知症 に関する正しい知識と 理解を持ち、地域や職 場で認知症の人や家族 に対して、できる範囲 での手助けをする人| ということで、受講者 にはこのようなオレン ジリングが付与される ことになっています。

#### スライド 5



### 【スライド6】

研究の目的です。

#### スライド 6

# 研究目的

#### 政府の方向性を踏まえて

- ・量的な養成の目標は達成できている。
- ・課題は、様々な場面で活躍してもらうために、具体的な対策を提示すること。

#### 本研究の目的は、

- ① 認知症サポーター養成講座修了者の活動実態を把握する。
- ② 活動意欲はあるが活動していない認知症サポーターの活動を 阻害している要因を分析する。
- ③ 活動意欲はあるが活動していない認知症サポーターの活動を 促進するための政策的支援の在り方を検討する。

そこで本研究の目的としては、認知症サポーター養成講座修了者の受講終了後の活動実態を把握すること、そして受講修了者について、活動意欲はあるが活動していない認知症サポーターの、活動を阻害している要因を分析すること、三つ目として、活動意欲はあるが活動していない認知症サポーターの活動を促進するためには、どのような取り組み、施策的な支援が必要なのかということを検討することを目的としました。

# 【スライド7】

研究方法です。

データについては 2015年1月30日から2 月6日にWebアンケー トを行いました。

認知症サポーター養成講座受講修了者、受講経験のある者で、20歳以上の男女328人、男女同人数程度から回答を得ています。

#### スライド 7

# 研究方法 ①データ

- •2015年1月30日~2月6日にwebアンケートを行い、認知症 サポーター養成講座の受講経験のある20歳以上の男女 328人(男165人、女163人)が回答した。
- ・解析ソフトはSPSS for Windows Ver. 21である。

### 【スライド8】

調査項目は、大きく4項目を設けています。

まず、基本属性としては、年齢、性別、居住地、職業。家族状況として、家族の中に65歳以上の高齢者がいるかどうか、あるいは介護を必要としている人がいるかどうか、認知症と診断されている人がいるか。そして認知症サポーター養成講座の受講年度について調査を行いました。

二つ目の項目としては、活動に対する意識として、講座を受講した理由、認知症サポーターとしての活動意欲、講座受講後の行動、意識面での変化です。

三つ目は、現在の認知症サポーターとしての活動ということで、活動状況、活動の場所、活動するにあたって不安とか障壁になっていることを調べています。

四つ目は、活動に向けた環境づくりとして、今後具体的な活動を行うために、どのような支援とか環境づくりがあれば活動できると感じているかについて調査を行いました。

# 【スライド9】

分析方法です。

まず、認知症サポーターの活動に対する意識と活動実態を把握するために、属性とのクロス集計を行い、カイ二乗検定によって分布の違いを検定しました。

二つ目として、認知 症サポーターの活動を 阻害する要因、および 促進する要因を因子分 析しています。

さらに、この因子分析で得られた因子得点にてクラスター分析を行い、その結果と活動実態とのクロス集計分析を行いました。

# スライド 8

# 研究方法 ②調査項目

#### ①基本属性

年齢、性別、居住地、職業、家族状況(家族の中に65歳以上の高齢者はいるか、介護を必要としている人がいるか、認知症と診断されている人がいるか)、認知症サポーター養成講座受講年度

②活動に対する意識

受講理由、認知症サポーターとしての活動意欲、認知症サポーター受講後の行動、意識面での変化

③認知症サポーターとしての活動

認知症サポーターとしての活動状況、認知症サポーターとしての活動場所、 活動するにあたっての不安・障壁

4活動に向けた環境づくり

具体的な活動を行うために、どのような支援・環境づくりが必要と感じているか

#### スライド 9

# 研究方法 ③分析方法

- ① 認知症サポーターの活動に対する意識と活動実態を把握するため、属性とのクロス集計を行い、χ<sup>2</sup>検定によって分布の違いを検定した。
- ② 認知症サポーターの活動を阻害する要因及び促進する要因を因子分析した。
- ③ 因子分析で得られた因子得点にてクラスター分析を行い、 その結果と活動実態とのクロス集計分析を行った。

#### スライド 10

# 結果

①属性と活動意欲・活動状況との関連

家族の中に高齢者や要介護者、認知症高齢者など介護支援の対象がいる 人については、サポーターとして活動したいと考えている人が多く、実際に 具体的な活動に結びついているという結果を得た。

②活動意欲はあるが活動していない人の状況

活動したいと考えているが活動してない人は、約4割程度

③認知症サポーターの活動を阻害する要因

「情報不足で仲間がいない」、「時間が足りない」の2つの因子が抽出された。

④活動を促進する要因

「継続的な学習機会」、「行政からの情報提供」、「仲間づくり」の3つの因子が抽出された。

※宮本恭子「認知症サポーター養成講座修了者の活動実態と活用のあり方に関する実証分析」介護経営第10巻第1号、2015年、pp.2-19

### 【スライド10】

結果です。

まず、属性と活動意欲、活動状況との関連です。家族の中に高齢者、要介護者、認知症

高齢者など介護支援の対象がいる人には、サポーターとして活動したいと考えている人が 多く、実際に具体的な活動に結び付いているという結果を得ました。

次に、活動意欲はあるが活動していない人の状況として、約4割程度の方という結果を 得ています。

三つ目、認知症サポーターの活動を阻害する要因として、情報不足で仲間がいない、時間が足りない、の2つの因子が抽出されています。

四つ目、活動を促進する要因としては、継続的な学習機会、行政からの情報提供、仲間づくり、の3つの因子が抽出されています。

これらの分析結果の詳細については、論文で報告をさせていただいています。

### 【スライド11】

最後に、結論です。

#### スライド 11

# 結論

- ・活動意欲はあるが活動していない認知症サポーター養成 講座修了者の活動を促すには、行政は、認知症サポーターに 具体的にどのような役割を期待するかを明確にし、期待する 役割に応じた継続的な研修の機会を提供することが必要 である。
- ・認知症サポーターの組織化を行い、増加する認知症の人を支える支援体制にサポーターを組み込むシステムを構築することと、サポーターが自由に集える場所づくりも課題といえよう。

#### スライド 12

# 参考文献

- ・森本・林谷・窪内:認知症サポーター養成の課題とあり方、園田学園 女子大学論文集、46、80-98:2012.
- ・金・鄭: 認知症サポーター養成講座受講者における認知症受容度の 追跡調査、日本認知症ケア学会誌、10(1)、88-92: 2011.
- ・ 荒川・加藤: 認知症サポーター養成講座修了者の活動実態と活動意 欲、日本認知症ケア学会誌、11(3)、665-677: 2012.

# 質疑応答

**会場:** これは、オレンジプランで作られた制度なのですか。認知症サポーターを、実は 私は知らなかったものですからお聞きしているのですけれども、前からあったの ですか、こういう資格といいますか、サポーターというものは。

宮本: オレンジプランから養成が始まっております。

会場: そうですか。では、割合最近ですよね。

宮本: もう800万人の養成が…。

会場: 800万人?

宮本: はい。量的にはかなり進んでおります。

**会場**: 数の見当がつかない。例えば民生委員などと比べると、多いのですか、少ないのですか。

**宮本**: 認知症サポーターさんにつきましては、例えば学校とか地域とかで、認知症の方の理解を深めるということで、今、小学校とか、地域の公民館とか、専門職以外の学校教育の場とか、そういう所で、それぞれ独自に広く養成が行われている状況にあります。

**会場**: そうですか。分かりました。ちょっと気になるのは、1番最初のところに資格の条件が出てきてましたが、ご家族にそういう方がいらっしゃる人が、何となく「社会全体の」というよりは、「自分のうちの中の認知症に対して、よりケアしたい」という、やや内向きな姿勢が感じられたのですけれども、そういうことはないですか? 僕の僻みみたいなものですか?

**宮本**: データ分析の結果からも、属性的には、おうちに高齢者の方ですとか認知症の方がいる方については、同じ研修を受けられても、その後の意識について理解が深いといいますか、関心が非常に濃いということがあります。

会場: 分かりました。ありがとうございました。

**会場**: 私もある町でそういった行政の介護予防の事業に加わっていまして、認知症サポーターのことをよく聞くのですが、結局やはり、行政がどれ位やる気があるかということが、すごく影響しているのかなという気がします。

先生が取られた320何人の方が一つの町であれば、そこの町の実態はこうだということでしょう。けれども、他の町では行政がすごくサポーターを活用しようというやる気に満ちた所であるのかどうか。多分サポーター一人一人の方では、なかなか個人的な活動は難しいのかなという気がするのです。ですから、これをもう少しいろいろな町でやってみるとか、行政のほうもどれ位活用しようとしているのかという、実態を取るような調査をしないと、本当のことは分からないのではないかなという気がしますが、どうですか。

**宮本**: 当初、私も所属する自治体のほうで調査を進めたいなと思いました。ただ受講者について、受講後の、例えば氏名とかを全く把握をしていないのと、アンケートも本当に簡単なものしかまだ取られていないということで、やはり同じ地域で取る、もしくはキャラバンメイトの、協会のほうの受講者に対して行うという、次のさらなるステップは必ず必要かと思っております。どうも貴重なご意見をありがとうございました。

**座長**: 私のほうから一つ。せっかくの認知症のサポーターも、活躍の場がないというようなお話も出ていたのですが、実際にはオレンジプランとは別に包括ケアシステムが動いていて、介護支援の中で活躍する場があると思います。当然、介護支援の中には認知症の方も入っていて、実際にお聞きしているのですが、それについて情報がないというのは、ちょっと不思議に思います。ですから、地域、地域でそういったシステムが動いていますので、その中に積極的に入って行かれたらいいと思います。これは行政の責任もあるかと思うのですが、せっかく認知症のサポーターの養成講座を終えられたのですから、そうした方が、介護支援に入っていただけたらとてもいいのではないかと私は思います。

**宮本**: 私も同じように考えておりまして、介護予防とか生活支援事業、ここにもう少しボランティアもしくはスタッフとして活用できるような方向が必要なのかなと思っています。そして、講座の中に組み込んでいく工夫も、自治体と一緒にやっていけたらいいと思っております。

**座長:** そういう活躍の場があるということを、ぜひ、講座にしっかりと情報提供していただいたほうがいいと思います。よろしくお願いします。

宮本: ありがとうございました。